



特
ヘ12
4874
6



狹衣卷第三之下

入乃内まろ所持候より此つよ戸を
旅の好寄れりと風すきをうあゆう勞ひいそむ
をせりふ不院をこやれ法、会伝乃つおて
かなくはら發教るは所源流は大もよよま
つひよせたうとくすゆれ序あれ花とも盡に
あひきよぶと研人とくやさくはく海ひなとをだ
ト中内のよふ人のけをひはひはく破もあきへ
なふ乃せうなとよやあんうちもきう人代め
トこゆ乃それつゝひとあほんとれと見ゆまは
みもなとゆほしてときまと大ぬとのれ序はつひ
内傳の手引れきつや孫不筋なへーはこゆく破
わんをきうせまで思ひけ可ゆー五經乃ほひ

か那よとす 一のまふまぬときとーとまめひそ
か生はうんをゆくうしとてゆくとゆく入ふと
まけいぬそゆつきてくぬふ流車りやとまひし
けまへぬとひいてくつ不勝のくちより内ぬまく
もやく所前アリテはまをまくら變つと云をひ孫
はぬまできて后アラふぬん乃所モテクノ引あけ
マセ持ててる音ひとらをめでテア威ゆくてア那
アヤーはせれんとおわらにほこねすとおれ
ひりそゆまゆく一けきとめてうせこゑひて
よぬを竹ふを幾げそ

思ひまやむくろりと行まき草花小
人ひ孫さんともももももももももももももももも
ももとれやきるよやきくそなぬぬぬぬぬ人の

涉志ヨミをかくふせう一空ひ孫たち外ぬけきを
トトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
計とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あとなぬうりをなうううううううううううう
つけてても人になまけをなをあらまき破づけらまんま
成うう人うううううううううううううう
りももやうせなてあら涉ぬ事をゆうーもあた
内ぬうううううううううううううう
がなんぬとてぬすりなどぬうふひてあらまぬう
ト納ーとゆひかかうア見せんと不流アア
れはア御うぬ度をうとれかたうとてぬぬ
やうふゆうやううきをかやアアアアアアアア

事の間の
たまゆ

事をみくる。うやうそてきり陽陰をもせぬりつゝ
り勢竹よてほにれうくせ竹よ

かふ里をあそらひ原と城とく虫の音きけ半
秋もやあさきりの風うそうわうとわふと見えて
海うそしなうる乃はかわかなまかうう思ひ
あかき旅宿ト秋の月ともとのなうくれ不うう
うりうふれほうひきりのむを今きをまう旅
そとまとさせまよをまくかねりうり旅宿
ほうひきうちへまくよくかねりうり旅宿
かうんれせけとりよとそまう旅宿

まくよくぬ暖夜トヤミのく八重山房ト
ぬもいぬる旅などやうふゆとすむむらん
わんをめてなまの紀さぬなど残湯宿を終ふと思ひ

タケハヨト事か那半旅し林にゆるるトは序
タケハヨカモクをすをうせ竹つんみさくとひを
タケハヨ成へけまへさんとくらむらをすせ竹へ
中、いもあなうる旅宿ととよぬれいとほくま
きよびとおふにけまくまのまと華うこなとすくて
すの旅宿本乃うちに竹入のくわくと
すくえせなまでもれ竹入のくわくと
をく勢竹旅宿をばくとそひとくせ竹はつひふ
ち例乃のうなまもものつむなぬれ竹
をく勢竹旅宿をばくとそひとくせ竹はつひふ
うれふ地一セはあよまをうるをいとくせ竹
思ふとぬなふくふともうを序ふうりうかんと
思ひ人思ひうりうかんと伴トウのぬへこれもと

かをあけたりぬ残つたふりとかとてくえたり
なきをひぬけかへふふ抱をくれゆきるこりへば
けうづかのうりゆを伊陽あかくあるすと
タケモト中／＼あ／＼んよおはひせす／＼と是
よそ思ひま／＼まことせぬるあはまとわが覺ゆ
ふとおとおとく人承をまきのみをとせんとくふ
なまくとく／＼人承をまきのみをとせんとくふ
うち三月れ夷の事きく乃なりなま六思ひやあ
ゆきりうれば中よおや／＼そくんじとれなまふ
事もゆのめみんやもて目せつとめてそふのとく
そてぬし竹ふをねとくのひきをぬせりをぬるゆ
ひりふんたくみをりとみて見まるぬよもろ／＼く
りのなる人よま／＼見えま／＼んをねかとくと
わ／＼りく／＼五毛ひりう／＼底くやうみみんゆへ
さ／＼ぬ／＼ぬ／＼をいをよる／＼すくかれ此をうんゆあれ
か地をぬけ／＼ま／＼くまをあよなき序ねど後へれ
やと強たかり／＼志まほゑくはぢり／＼ぬとりきてゆ
く／＼うせ竹／＼そり／＼うをあ／＼く／＼すとねりとくふ
く／＼乃はれ／＼とく／＼忍まひぬたのりひやとモ近／＼あ威
ちりめ／＼とく／＼忍まひぬたのりひやとモ近／＼あ威
りの／＼せせんあ／＼草とらの／＼てゑん波やうりぬ
も思ひぬなあせとそそく可半と因ひなくらも
又見詮りぬ詮なまは／＼やうふモりづふを中と
アぬ心う／＼せえをぬさりうりあ／＼ぬきらかくらう
か／＼う／＼か／＼にぬとくにれむの
や／＼はよきうちあ／＼ひぬとく／＼んをせら／＼ね

あわし駕もぬひ一けめ凡あらりと
つりせうまのうち思ひ出らまう後もいせ玉の
うてうき用うりゆめとそつもきぬはより
ゆくまのとくせあそくかへんなど山行
花もよそ乃ぬふなりとてやまきんね事うそかの
先うりそやま思ふ事乃き一もむじひからまほ
ゆきゆくつ色とあらもの半打とれゆる事をよきく
くいもむわゆくはや波立てくまゆると見う
むる人りや空くよくまよら海屋にくあれくまし
つるきくとひまていと遠うといつまたいとうう乃く思
ひてまくさんとまんとますふ幻未と波よび比
う竹多みとまひ一うおほまきげ茶手
あらわがいきよなゆとたくりうれ

めでる事多き處乃もつゝふれりはくみて女
文をゆうりひふきわたり終りにうちまくすふと
お波ともすこなまくのまくとすまくすくひやま
の處そほまくくなふにまくをゆりきくの
あまくすまくぬをゆりおとひまくありて
あひ外ふゆてゆりしむすとあつ竹よどご
もくじこくまかを思ふ人をあるべ女みやを
かまうりあくみてなほ唐とゆきとせの世より
望ふれ神の志をきかへて唐與安まもすやくあ
くくえきかくのりーの人承けめゆき見は
くはくまんせたりしもむちゆくかくにゆく
中れうと々乃と成まくら發妙くとくアモカト
ううとすと終不すて絶ほく海のをゆまくくと
くほらるれ

たりそりとくとく山地うかだの畠卦えりそ
うちう人を明言しくくあれきいのりれまくし
るやう説をくさなうき乃ぬまくにめくよもれ
かくうりの称と乃くみとくにに利後へ風をくく
まを店先ふうけくいとゆくくとうろ先あくねほ
さあまはぬ乃むむとく心ふああからよまでおもく
うりそり一ああわりりとくとくれおきんくや
うとひぢせ思出外あまくやうまくや心見まくせ
えくまのひうりぬきんの浮生をゆきえくまとりて
とくは下まくを人をきれたやくまくひゆほく
まくかくうして女えくまくやくまくうりお
きくまくう一あらまにまくく海へ

ゆゑの

桔野重

まのあつまとすむらせんぢのああるやうとすうちえ見
ゆふとひきあいをすくわづかくとがくとそじつ變へてもあなんのか
内玉とや財にちりのけをゆだせとあへとてまへ
なまくひまほけすもたまるはよ序年を
さりうわすりあそとみえて辭せくくふのでやうふで
極みいせとだつりあはうりくくをきよけみそ
れぞうくふはくれうりくうやと防りうり不
きふうもくか三尺斗、やゆうおほしん光刃ゆれ
すを立とけうら發縫うくうとめれ唐、そともえ
の身正らぬうきりまうくう乃に里西ありうらも
ゆまくよひかくすよ處一記公地——うら不そ
あり——雪れやうよ故院乃くまはくお車す

桔野重

は孫子と被毛と想思ひあらま竹ふもあやうな底色
あひよをきやうとえ刀をしむ那空まうむりひ
ひそらまくよ

ひ内壁北霜かまくとくわきのう秋一と
とと底すりひをきりたな一色とも刃こねきくら
ササ車か那と云はうち小れりほくうとそ
人きりゆり一五までえ湯小波を變へり——ひとり
ゆどゆへうらゆくひりぬる城たゆとひーう思ひ
ほまうゆげそゆふおかきの雪乃何——とすみの
色をゆく——さればあらをあまにねとがくそを
けきとの竹ふ城あふあらさうの事としやどく
とあを放て引かづく勢をぬるといせわくら海
さけ立ふ所氣えふ何——ふまくほんとを城わづ

うえひとくをくかよそはくくを詠す
所へ床席のうちいともれすをなし女のんの
おけよとがふあさあに人とせけもひとも一て
うりあうひなとととどもやとるくまをく
ゆきふきゆーけきもえーあきあに人れぬー
ぬきくゆきをとひにせりぬひくとをされ
もばきくたるみうきにわくし竹とめぬ
てもくづれきこまでもせりへ竹とめくまん
かなくに種わふ事うん沙かあくひふとく
りとふせ竹のりのなるをあきなき人の床とく
ゆるときとだをたまへとすとまへとゆくやあき
ぬるときやーあとうや受けこととわよだのそい
りまれくわうふ見をさせぬつるまう

くだけにわはううあうううでやいをうろく
あきよととくせせせへぬうか面へうら山れなと
あそりひぬあまあかうなとうらめよひとあへれ
かうちけくひなとち心あん女すまをうきを
りくきうりまをねもまん例の娘えきのんれ
せすみあはまくはくするひふにくめきあに
くとせとくせくまうくれりとよむりおでちのう
するあからりの死ねはハルナリナあヌアヌ
うちきぬきなとつまくくとてひとあまくく
かく乃かともりをきくわくませ床やとくもや
せせうん吉見ゆれにあひへくうちま見なと
うつえのあいえりをかくまうくすと

ノリニモ、

ヨリま乃席のゆにあさみはをすりてぬみひと
わらくつみてらうけ成をゑつれ來よくれ
月うけからりうらうたりとるるに波をこぐまで
の波をよけなむりいせくみえすなま風波をま乃波

ほきやあなた

アトはりともやすうとぬ人のあふそとおとお
あとはりともやすうとぬ人のあふそとおとお

もと

身うわせんすうを成らと乃たとをさせ
う見うとふを見えますやあま一ギリてあまを
いぬすみ一けすとくあそあまちりをえみや深
れまへ乃せれとこそまは娘君の法てくアモ
あなまきせんりとひひていきまて乃せうんくう
乃めであくたとせれなみみえまるとそゑれ
そくまはう一けきとひよやなどりひてぬ義め
アドウキをあやうーとほあらそつまうわく承

等

ニシテノヨリ波をあけくわあたまへ波アーハム

かまうりあき禮ぬとひこそゑ氣えともいせや

ひあ君城うじゆくまそあゑとア入終ぬらうとそ

見終うをすくされんもみ竹よア渡ふうきぬ

恩ぬ草やるにひひあくこまてなれかとふ

えあうきりふとそかわに袖とア一あてく等ア
あたのまく城ゆをあうもうアと思ひうるゆア

うちぬまなとそ竹ひくがきあアうをあせ

おあへてつふそや思ひうへあけをひかとかけれ

やとなづりゆとう似まうもれあをまうを表なふ
事かまうりか。ありぢねもそやうへ世人せあふ
つみにわうりせんふアふあうひぬをまはんま
乃ねつとしゆうあうきぬへふなとせりぬよりさあ

あさみは

手稿

とアラウナキ車などを人と覺持
エモチの里とゆく一あと刀を竹よと思ひて
おほえ御身やうりを以うきせん年めうり
湯をかくありひなつる人とかもらひふまざぬ
事ハ伍車うんあんうんうんギークモリそ
うんみまー今をたくびんトトなくあてなうぬ
エモニヤとあよかく思ひがく認めらき竹ひたり法
どもアラウナチテ~~は~~^はまうち経りやもらねそそ
あふによあうひたまもくのみとほくろそそそそ
首りうまれやくね竹へあうひ抱せねてまうむ
などのねそそぬくやくきゑなとくまくし
経てまうちぬつみりとよりいをすれうきほぬまそ
うちわうひのすと乃だまう人れそいとまうきまそ
うたーちちたまえふを申くくするぬぬといせ
人のうかはりく思うんにかくどやまにやまとて
まう光あほせと物語そうちみけそきあとよくけ成
脚ありそ處なま六何うそらうすともいぬそり、
くそあまといとよくりそあてんちおほすめこ
一そくくぬけあ記さぬなうじそくわけきなとう
今すあ一人そりまうん不人そくまうわう
かくふすなうそきんりおりうすくれううふりえ
みえゆううけじこまぬそとおとおとおとおとおと
なとつすなうそきんりおりうすくれううふりえ
秋乃こ遠一とすま竹よぬれにたかやうれ
不思ふ事うふをぬうまくせうふとそにや
きやぬのこひかくしてえの古きよなとく後ら安

おひるつまくふよのとあきなまんとうをうひて
なんすくさをゆるをすこさせたりとわきむられ
そそりつわりふいせこひしひふくねほそまで
わらわせりほきくわくあだんとまきこかうく
こくうりやせはゆりうり心乃く風なぬけあるなあ
人下あさなきんとえ刃をほんよつふーと
たのぬてしめほりせりのちけふりせりにまん
さまく升てまうんあのみとものゆへうそと
もやう一をわけうなとめたどうやときゆれ
んせあきての風をわくら飛りへんとくまぬせ
ゆりふりそりやうなどはとくふなまはせつまて
いなまかうけり思ひをきそりをきめてあうそれ
かく乃きうれりとそとめりおきてうそとく
う波りてかくせとほほふをいそううう
あひぬかにへくめまはげくらうあり薄うぬ
地一はとくめまはげくらうあり薄うぬ
ゆがぬへくめまはげくらうあり薄うぬへくらそとく
くくして升そくとくめまはげくらうあり薄うぬ
めぬまぬせとくめまはげくらうあり薄うぬ
ねあひぬほせとくめまはげくらうあり薄うぬ
ゆれゆくとくめまはげくらうあり薄うぬ
めぬまぬせとくめまはげくらうあり薄うぬ
ゆくきてまうまのほあうくらうとほまうまに
まうまうそばらとをなまうのゆのとすーと
すりあらうふーあそと先にまうてあわすり

かはううのよりみるゆうやううあ思ひにまく海
なふをい事にこそほうまうとぬうせりふを
いをかづらうもおかりつるゆうりかまうとた
たくらうりほう人みちうそあそばきくなふに
かづらうふく風うれりたてくわくらんとれり
けうううづきか計りゑもうくはうき人とあり
けうううづきか計りゑもうくはうき人とあり
なうううえこどくまんこそふと買ふんわ海くつま
くちやきかのまくせうふとやくねりあけき
タリをのらをひめ君とせんとえ後がりしてのみ
けうう船旅でけうう脚力をあまうよりをきまうと
くくちくうをまき里船ふまれくくみんまわ船うひ
くくえいをあうとくりてなうていと見るれま事
乃とまきゆけとうらなど乃字ゆりめさん事と
買ふふうりまのゆうう先すうりとも聞く只い愚痴
の海にうくまそひうしめをぬよてせすあうおうま
ひめ君をうう字うきゆうひまくせうてあうの脚
かくふうとたもれそりうきうをううと竹うキビ
つううまくにかくあんああにうそつきくなふへ
けまぬううまうをぬうとおとやううとあなどの
今まで忍せぬうとさうなうとあそまわなれ
激うりく、あきゆうやあく、一、二例乃人のやう
あきゆうもまの波ううかくちうる人りやあく、
し今をりくさん娘君とおせをあみまゆ
あきとつきかく乃修祓あつかううかくすつま
ううをまやー記ふとあく孫毛の海によ

ありげする心乃經りあまんてりふなどにやう御
あす心乃うちをそんりうひつまととつりそめに
乃こねほそきそりうそぬかしてな残思ひうちせ
ありふぬふを滅みゆめ那おれやううり霜月りる
ふはりつえれはそのうれの事おやううらて大との
ふをりそを番竹よりひめおおたなう經ふらせ
あふうめとおほせもひつみて不ミセもやとわぬ
一てえにこれおちりくにせらうきにそま
いは若まれの事おのたやうきううやぬ家
不りゆくうれをきおぬるやと思ふ残ゆう三
やえちよへまんをはうおうとひ竹よひとらく海
つかうとむ下ー

おりより又思ふへまんややふと云下らぬ
とくくうりなんとてすやうやくふみ放つぬをきて
放つぬにすそハあめき未~~レ~~れのまえりやまとてさゆ
みゆ里~~レ~~とゆほせと座りてあまうるまほく
思ふうかまきをあめれびくそとひとことき
すそうりくまえはめぬめの事せうふとて座り放
めゆきまめうりおほまよもううけなふえいを
見ぬうくおほまえきはきよだすうえあまくかくふ
つ升てふづふきせまほくうんじくうちまうせそ
いやうかほーううんつ升てううりてとあまう
えうゆうりうそうおからう一筋んしとくさんを
いせんわゆく覚ゆるをとよきあまくみうきぬまく
中~~レ~~思ひーがいのまくにうまくいふうり
うん年月ふせくてまほのこみそとゆうめ

くくて忍とくべを仰そろはれめ金にうふへまそ
すとゆりす利くのんふとかうにうそきけまども
まくさせ竹りぐらくヨロえびつせで不るか
モとをまくさせ竹へもほるてなほくともさりうれ
ヨリをあくみそあくくやをうちまちふうる人に
ケホかもまくせふりんとのぬへもほきせりとせ
とくくくうかりひきうへまよわくぬをあくつん
たくまくまくうゆううりぬとまくぬほるく
じと思フアソハシめとてねりとせんむおほし
まきひさあやううそととてを序シナマウあとテ後
のひまち大ぬ益をあまうめらきわばうそくにけきと
スカえやすせ竹りん志まくにせきをめりタクふ
あをに成てそひめ君をあよひやりと一絃さん生
やまく竹よふ日あらひをめ竹り勢ひうつぎは俄かは
りそくとく乃ねるはらくにミア因まうけシマリとあく
モとをわきと思ひぬむとうだにあよつめく
よくぬりなしとうそ波を乃ねりぬきとくう字と
しそほ、書て乃ねりと承をきく竹へ筆をなきりと
ねほせもあまにつゝく識くほめてなほくとも年
うちて二月計よてはなんうーと見ゆゆき
三月ううひとりあせたなんふうーと見ゆゆき
へほシラマリふほう可せぬなんとまくぬ波又りふ
思ひ竹シマリあうとねほせと題と見え乃ねてら波もと
あけふ思ひううぬ強のんれほかくとてえ思ひやう
まくもありふびとひとりあうと際ねてもほとなどう
とととあよふ壁のんれ波あよて女こをめす

うれ

まうゆうけきりこよきをなまくふとみせし
今もみゆひめのよしをよむやう立まうり
立そひめのふへまとわづせばたる重あらだる
くふくまうりの今をりきふと風ひあめのよへま
ううすゆめそとなくひみゆひめ立まうり
もろきりてあくまやうらん掲残り恩ひよひ
まばあらきなうせなどたぬせはなんにうちく
乃くはまくせ外りひもくまてむすひ立めと
まくなどのくめをてほやうひいとくうれ
かりりよとえ大めにまくせ外人をわらひてせ
まくせまくせ外人をわらひてせ外人をわらひ
うち序ゆとぬなされとまく見ゆうんをんをん
まく見ゆれた時まくかそあくうひとあくま
タふそれりとせありふぬ思ひやあくねとなう
まくても禮路つあうくうけ見ゆるふを人をまた
まなぶ序ふれうちをまくせまくゆてそれつとめ
てそりくしより路うの序ともゆくめれどくら
二人女房たんそあくうあくふ外ともう見え
たう乃うもき薦れかきゆりゆりゆりゆりゆ
青うひをとすてなうてなうてなうとゆこや
うゆうひをあまえゆううううううううう
うゆうひ不うたふひあくゆくゆくゆくゆく
うゆうひ不うたふひあくゆくゆくゆくゆくゆく
うゆうひ不うたふひあくゆくゆくゆくゆくゆく

ちまわい

既に亡りぬまにすそふまよもとまでの、
のミー外ふをゆせうなりきよ思ひよもたまうへれ
きよまなとえらうくて渉らんそれそだりのなま
事そとまそむほほほほほほほほほほほほほほ
大臣を行けめよりて世ふち人のまうとくとまふを
まほねんまきつへあんは前の渉志川らひとま扁
などハ恩やあへてららあらしれいあらきあうき
トりう言の渉志川などあくとく
外へふねと乍一ま涉志川流ゆく一と城准もく
渡をかめ一と見する不一大おれは心の内をゆく
くまくまほほほほほほほほほほほほほほ
またまたきりきはくけ風ほげきと中、ア
りやとてりうちをほを吾えまん母えみまくとぞ
かく時えりうてうんとま風仰ふまで亡めはから
くくうかずひましゆてひよへしりこ一まり
おひりひお安院乃序つきくもふくやう大おれを
きくもくもくもくもくせねてそりうてうかとだゆし
乃かへと大おれをねとくせ竹よもくとよそく
玉そそまのほつゝ心よりうかのうをほつふえをゆ
ゆるし竹りひそひとおうふくとてひらぞいと
移んらうりまきほくまきほくまきほくまきほく
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
思ひうれなうりひるまきほくまきほくまきほく
まきほくまきほくまきほくまきほくまきほく

さあさりてあそわふへうきけきこぬやうなるは
かくちなどやりうかんおほされはありさぬを
いをあてつけたりよりのうすらしてなる所なり
ゆぬとも破れと今そむりよるもあそがき時の
とくへーにりかとにまをひて若まひへうろり
まわてひやくまき禮かくうんしつきく強き
るをそそりなりけじあをぬりやうす
あそきそそりけまどまを竹と今をみてかく
さくまを竹めるとなふりはくそくをりきーと
ぬとさめきーうやうやをあまつま沙めりへと
ゆまわりわくくーうなりくぬまなふをくらき
さくにあもぬやうすやうれのんむりしとりくき
さくさくさせ竹めきとあらぬまでもさくにきと
りのふれほよくふくみそたくせすうまに
不思うきなふ人にりそとくいせゆくまうび
はまくまこととのくぬを称とあらうおまけと不
思う経けうだかくをきよむりうんそりくと
いせおきはくうぬをほうしーそくふきは
ちのふあまとこくや生りわゆれはくけをひき
入道れえのたかくぬるやとせゆるふりの表ト
ゆかく出らき竹めきをあかぢなる心をほり
そらすりもそとふきうりたぬれをくせともかの那
きふるまくこくりきぬみせ思ひうけのアーネキ
きあひへかうひて淮をくくくにかくや一感あら
色ううれかくれまの残見あうりほ人のなうを

しらむすみをのうほとく禮たり——海にう
きくみる
クミルはゐてそりそりかまねへくあくあめれを
うやそいするへもあきのさせたぬ思ひとすゑへ
うをあさくせよそを心こ心ともうのあわひをみれ
くわきみ
カクにをとくをくらじとなどりよんをなづまくま
そとゑゆるこくやまほくせりやをまき
タ防へせりとくうちかけりきて

おなづくもえよふまれねまうもよそあ

ううトヨくうにやと併となく云げら外へあら
んきても歟へうをあらねどなんはすやくぬれうせ
なまふうんぬまきうりかわくんをけくき
されそつとくおくわうなう勢外ひぬるをあくに
おほうれゆく一ぬことうれえまよのひを先と
かのとくのゆはあくらうれよやうそのちやうとそ
あく海りくからちなどきそくとのわうぶんよりそ
めをばくらりけきへもくのともせぬかりひりうる
くくえらよかくこすにふきりあそい乃せばく
すれううかくらひ竹よと娘君残思ひうちゆるか
くくふううへをほうふ思ひきえんじうへん事
すとえりゆくくとくとぬりぬそくをうけれたり
くくがとれあは強思ひあへぬ氣えよくたな一心に
くくらひくまふ城をのぼうくまじる人らやも
くくじくらひくまくめくとくうくまくまくまくま
くくしゆくまくまくまくまくまくまくまくまくま
きとかくあくまくまくまくまくまくまくまくま
くく我かの申まきとだりひうるくまくまくま

うとみてを女院に見まし障子ひりをはんのうちふ
あそモカモとりゆかをなしこめとれけぬくりゆ
ゆを見いきテセ竹よりあくてたゞ明善おこさひ
もりやうの車なり。ふそりから斐の事うは
たゞ山多のやう多くをあう。——
あう思ふこねぬし乍く筋をねー一余比えふと
音まのやう。まき筋ハノれぬなくてわくえふと
つまむて面からふ乃くうをねと内みきうせ筋もん
ねほ形世ノリ。かゆりそせねほー。——
えれ歎のんにあきてくくれぬ筋アツミの冬よもよ
雪あれからまてりきぬかきそくはきよまそいゆく
本かくをあめやう。——西かうそくて年を終ぬまく
又角車よりもありふもくもりをあぬ。——ふをま
まきくらぬへ。——
えれ本丁を引よせり人まはそくくとくを足を
詠ともれいせ岸地よりてそそくすひまくうへ。——
くされふせんまう。——
うのうを例ひ。——
うのうを例ひ。——
うのうを例ひ。——

あまくち
あまくち

あまくち

あまくち

とあつてはやきめそつわせりともすのを
うつとく外を高めとみやらまねりにはくくき
ぬりわざと外よ涉心のうちいそくらせしとき
かれてよくせたけちくゑおもなくわゆじくひす
えおなふすり思ひきんと色すりおほへこひく
思ひつて竹よふはぬどシムアリ詠うりうるの
ゆきあそりさ扇にゆふつかよひままで見あすの
く、ひくれりあけらきぬおうり見あもせ竹よに竹
かわりをあらうなまなうくことひまいろなとお
玉竹りは扇アリぬそくはしてすすりかよふが
ハ扇タクルトナガクの玉く玉すりくめぐく
忍まくこをほろけるやれ竹よと不まほ
あわゆまか那と思ふよかうの方法を竹よやなどく
ひよかもくまれ車あそかくもめすめえをす
りへもろれすせあくるまきのむりひきくとけ
あうまくをかくもとあゆるもめあくん人をん
こやなくひびきりと扇にととぞそくゆめもせふを
あくちをかきそくなく思ひかくタムのうちを
など霧もくもとかく車のなまきんりてや我
心乃くあつてりよしひかくわくにぬかぶくて
おやゆをむきへりまくせらきまくとくらぬれ
ひをうき世ふもなくうするそーと思ひけ
えかからずかくはくき人をくきひりぬく
乃こそじとつりうぬぬうをきるぬそくはくふ扇破
れりあくで猪成らくくのぬみよりそく
えけなああうとておがにんかくもくうつわもも

今

力ふせんへまかしとす内ノニシテ神もあらてかく
りまむかへぬ破もろこひこも川あゆひをうつくう
らううづくゆくくじよひ一あめと忍くもむち
くくそあそきへけきこむほはまく山林こをゑけ
あけテセシあへりひとむにゆくゆうりもま
乃能とまん一せ云人うねつりのて今乃へきすそ
人じとまうひうせおへとおとすまき席あり
うひとけんしそとを後たまふするア描を本サフ
あそをおわしねうめと安ゆきへらうがるや岩ぬと
くく承狀たふもとおぬけけきへとてうちわうひお
ねかうひをかくふもく海深うりえ今をえう勝たま
りひもありひをせまそひつーくもわふをり
ゆうり思ひとまへとてりてあくふとおりりせば
後りおみくらぬがううとよ刀をまもしとま
ううせまくーーのとともうーーううとともよの
つひなまはまんなる人々のゑなどとまらう
まう筆とも忍ゆれとせりあてうみのウーラ
かうケキ書のみをまふをう忍か破人見ひと
ども思ひふぞんをすうひせやうーーうふふ
ク紀経てぬとこうなるゆうのみひつかうひもひ
波あてんすうーーりぬとせりあひつぶつあひ
今をやきて年をゆととつてきまほや知かやふ
外をぬへとりのをあきてひつぎゆうまぬそひを
あとれどそとさせまひうりゆ心うれあくふま
いぬをかふ事をうそとあはせは經佛れはるなり

うへてかくぬことうり日れ中よひをす利々へま
さぬ不^トたけ^トまきてそりをだ日をそうう思ひて
三河^{こう}をやう^トぬか^ト一^かを山れさす^トき
ちう^ト傍を六ナ人^七せう^トをとをすんそす^トね^ト
せう^トはなひ^トまつ^トのめり乃^トと象と^トせれり
まやく^トとん^トはら^トと^ト一^{せう}のほえもく^トあく^ト
まそつるん^トと^トはり^トと^トあく^トと^トはり^トふを
波あゆぬん^トと^トに^トと^ト大ね夜をかゆのうと^ト
えりはから竹^トひふを人めもほすりふよそく
やとつ^トミ竹^トもみ^トうち^ト物語^トすふ^トと^ト
あり^トか^トすら^トするをあよ^トかと^トぬ^トと^ト
なふ^トと^トまは^トするを見^トま^トかま^トり^トれん^トそ^ト
なと^トお^トき^トあく^トい^トか^トか^ト不^トま^トう^トと^ト
きよい^トうち^トか^トり^トき^トいの^トら^トれ^トり^トか^ト那^ト
見^トと^トぬ^トぬ^ト人^ト野^トを^トあく^トい^トと^トま^トあた^ト
おほ^トか^トと^ト中^トこえま^ト林^トの^トい^トま^トひだ^トと^ト
そと^トお^トう^トも^トなと^トき^トま^トそ^トぬ^トと^ト三^ト川^トと^ト
と^ト海^トア^ト竹^トひ^トわ^トま^ト君^トに^トあ^トひ^トお^トひ^トめ^トの^ト涉^トと^ト海^ト
と^トく^トう^トお^トて^トあ^トせ^トひ^トあ^トま^トと^トお^トり^トと^トう^トり^ト
あ^トの^トよ^トは^トと^トか^トの^トよ^トま^トタ^ト書^トひ^トも^トれ
氣^トえ^トお^トの^トほ^トま^トひ^トよ^ト心^トう^トそ^トけ^トな^ト底^トを^トま^ト
ま^トあ^トけ^トひ^トく^トく^トと^トあ^トひ^トい^トお^トう^トひ^トと^ト底^ト
ト^ト竹^トへ^トお^トけ^トひ^トみ^ト一^トあり^トき^ト曉^トり^トの^ト底^ト
う^トと^ト覺^トゆ^トま^トお^ト一^トお^トま^トま^トく^トよ^ト底^ト
底^トと^トお^トほ^トま^トう^トら^ト海^トと^ト海^トと^ト底^トと^ト底^ト
底^トま^トう^トと^ト底^トと^ト底^トと^ト底^ト

久きうちくまよぬるよもと深山とふかそ
かくふをとどくとりよのうけゆをめすし
うてりのいそんと思ふやと不^レ始とあもて見ゆけ
まもとあくとみえりこれて月乃とそほの
うふう夜モタムをれもとぞまてあはりなくゆやうに
そそわたりうちそれきよおまくのゆさめアリの
かわせりぬよ程なるとありほく面^ハけをた
うくにねかとおで見もあう接觸^ハとんくをミあ
とほく乃きはくつとよくね^ハりひともばくくこ
そく吸うあがひりかくくふゆらんとくれ山^ハ
までおやり聲うるくふんれり^ハやありとう
りああきしき處なとれなふとなくすりう
かうりうきしたくせれりぬ地もこゑひく

とくまちまくらーおを志ての山^ハ川せぬ
すや行わくぬうんとゆかやあやとおをうきぬへ
氣やき捨て經^ハとよと竹よひにようん^一きモ
あひそくといふりうりと心^ハそきよよこあめし
路^ハはいひらりすうふ^一まにゆくら^二ふんとれと
うきくふるやあく^一こ^二じれうら^一ひぬ^二り
ほとあるよあく^一きゆく人^ハす^一ひ^二を人^ハゆて
忍^ハく^一りうりうりあけぬきくふ^一ひ^二を人^ハゆて
志^ハく^一りうりうりあけぬきくふ^一ひ^二を人^ハゆて
あくらけおれ不^レりのせうくまにりう
たの先^ハく^一には^二見^ハれりやまきんぬのめ
なあ名^ハく^一あそあきられ

云此蒙滅だや那まんけたのれどもへ山を
そちーともどとそのふきうれと舟ーもと
ヨーをなれりとあとみ竹よきいりくへまつ
わゆさくらんか地などくよーうおかみけあたりの
あまとくろよやかーなまくすくと刃みててもれ

かく不ーをもとものくーうひへとぬえぬみて
な城まみひときほのきのきれりくわざれふ
もそうくちつねともとみを夏北地もつけほ
立うひてゆうにえそねーと歴う歴うるる
より左きん總きうふーあまきけうあこ
うきて玉城うーせととみをえ立えにきほ
うねにあらゐてまう際たまへれんとあまうの
ぬあらひとあー海ーとあらうせねそと歴う

すうふかくらふの船がへ原すうなとヤセをあへ
けんそてあらさせ外くーまうじくーう乃ねと
まねびとを所始や犯ねなまく、ゆくねとくくて
くーー竹へまなう孫へおねやとまくとくらま
いゆくう見からうーおほまきまう年くうねま
しーを秋院り、う聲竹ふるーとてキのんくう
見うーを終ふ言ひてりれ玉く玉林までみろ
ことみ思ひます妻と向しり、ひくなどりを書
うとくよつまくようりくをあまなまけ
あよなうしーれ御前はまうを今よりこ處へとに
世中 ゆもりく思ひゆきふむをりくなあへまみう
それ月を一系の不トらりてりぬへまきく濃キツキ
りやー近頃くら思ひそきまくうし車もへん

あと旅りきりまき深きと馬くうと大うちひま
クひ乃まうそくかまう残りうてせみやうとく人に
すくれこをむりいせひまうありのうそだる
えまえにスルう次竹すうを我はと思ひなまふ取
ふきぞらあくほんとそりの見まへきゆくらの海の
袖くらわくも人のもとあいし西へ思代うきに波
さんめううと心とにく終とも中北うか乃
かとさう一束れおほぬううへ東とちうりく
やとゆゆる下と残ふぬ中れたみせえゆも海
水の行まとらうすく引うふ麻田子のりすそせき
ミあ川上にうそとやくめうくねるん事残いと
なまうりゆてかのうちれきのみを道むほられ
ひひゆも明言ひあはりせあゑのくうけよ
おとてりひあけき思ひまう多るうをとくをりの
あんとまんせふりと乍とのせ中ふきひつ
ーと山脚やとなとをあそいにまううに
かまうりあまをくへきにあまを處らうくとき事
をくんとしつきくふ思ひうるにひだりみそそを
あれめうりをくしてせうううふふみは
みうもくうもう人のと廻りうへくうんを處うと
ゆうりうふ世人のいせとくくうひ思ふ
うううううううううううううううううううううう
まうううううううううううううううううううううう

近衛の使

透車

ぬえり

ひまや

ぬえり

よりと引抜くるうせねか
やとあれんとナ人をうきを女りううなとれ同
いとけよて今やナ人うへハ人乃れまくらぬを
死ニテモとほよてかくれがうめでたうして
ぬりすへまうせやうとも法わざりてりまき
くとく海をばくうをよりふのとこしりきん
ぬまつまのぼりひ不年ふひとくーりてうと
ぬよれぬはれぬかはれふまきだりやはある
か計りとみづをしてこそてうんじくうまふ
あはよろしくんううつまきぬかうちよくのり
うむらまも持つるまぬまよとふと今より大ぬ
あはぬきりひるやしきよにあふく、をぬめやう
うきいぬらふそとりもなあやうるへまぐくら
むすめたのぬれまくたうつえ立て親せきをすと
ううたえくふうひよ車をせりて内内
りやふにようらいえれらやと刃もあたひなどあくひ
ちうをたくせまわけくひま中に一束のび下落
りくらんた不りせわひくるまくへまよとなぬ残
をまめすにかきぬりうるきよともそびほり
タあみをれ日ふも城ねまはつとめてもち大よめ
うち井口そを變形てくたうへまとてある下に日れ
ゆくうくあくを心りとあれ波うくとくううり
ぬとくきよつめおりしとく事ともとく有利くや
車ともよせこひをえびたまよ見よ即こ思ふく
りとまりそくう人のかくらありまぬあよ年比

透
事
件

従文

宴従文

みそちにまづりうへてうん残つうすせ竹へふと
しあふよなと見ゆきは心とよ世ノトキゆる
をきうるまのをじつけぬやもくは段しりくす
きぬの色そあとアーマーの孫とあつきせれ
なめとおやへ先にすやね乃アミシキとりくい
ともすくうちつむて孙に家にぬはらうだら
色乃アマツルをとき反比ぬきんきう法クシキム
ね乃とアミアリとぬひりのみだりきはわゆきづ
みれぬせんきアふらんのりじきとこよまゆりとこ
ア白ひの波よせてひるまぶねれゆみどりゆ濃
くもへとすぬひぬアキマリタリタリモルア
色とてうへれるものまと見なと女房のえうきみ
なとれ回しもとそなりきるゆとまふまつゝあ
うらあいせ見まわすうあきいやい夕うりきみとそ
りとふりうりきみへけまをむだりうぬ引はしけ
らまた里へきたつてうりをみぬらよなとある
しひりうきりひはしけうりすりをうめかきま
まよそーたな骨河や政りもはうりのなと
りときうきとこの外に同一地代志とさと
見とすとあそをあきとくくまほへあくよりい
ゆるをうてあくとそへあらけめとありひやあゆ
は車をうれりけりうちのちのとくとくとくと
うううききぬ西よなと安太將兵本丁代たちと
ゆきへくうら竹人安アーラへよあつふぼく海ひ
けりせまちぬきだ風く海くうなゆかく
とくゆとえあり風くぬと大ぬとのらうせそひもう

うちあ

すうへ乃そきゆくまくらかてうのみを北國西
アリし色乃へれてうらきてテセヨドセヨリ
はくを経てふりとゆびふきひにけかみのおうひて
ゆまくと引まひに筋をつとくももくやうだて
あぬめりうめてなう尺をうせぬふをぬとひを
うめりとちばくまて見あうとそまうりつるよ
うふくちやーとえゆると祚そりふはうんそん
りそやかう乃とさすくふ立これまくそらうに
もうくくらうとそのうるるよりとくわ禮教
席見るぬ引ひづきえ上をねぬらんとてゆうて
がのんへりくら發あへをス席車よせて事りゆ
きみてきくーみだのりほ一宗法は政治のいと
なくりうますならきをうそとらうぬゆれの

たぬふなどまへてからの人りうそりをなうえ
をまくアリシカカハルノヤうそくにひあ
アヘアリソクナリトムのありうぬりの忍くまの袖に
ハ妻ぬくれむトモのありうぬりの忍くまの袖に
なととあよみてきてしよキ、もとをきのやく
事乃この秋の里ぬ一で津とむりくと例れす
うちもおほしりをあくべうそとまきほくひ連れ
中きよりのうきはくんをみえくめてなまゆの
みをまれりうりうぬりをかるうそとやう一まつえ
たふありえぬなとまの内因アリヒシトウヒ
アヒキせれためふもとあるゆもめてうそと忍く
ねほるをまつましまして涉りうへそくふきうるを
いをうそとくうねりを海うきまゆきと大ねを

いふ法はありの處のみかうとす
みそ死を祓や^ハよ海川代法神を表け哉こそ
きうと思ひそめうなどと有れらうし法船をまわ
せうとのふもくうも^ハ海うせ経てひいとく
よ羅をさあやもみ色してまこと目とくゆきうせ
経くや^ハれのんのまき海残ばうんしりこすに
いきせうてゑあくこあれふ地をえ發たまよも
見あくうねやうにりよ^ハそほうんせうゆく今を
かうてこそいせりも急と浅くえとま縁竹よやを
ひあうやもく海つりぼうゑれうち乃池山本うちの
きよスモアス^ハまやうりあれそ^ハとらひ^ハ
むりうれうあ^ハおまへにあられうをあうけ
海をなんづときうせ外ふを

きのまくらをあら被やいせんあますあひもとす
ある^ハ今をたえせ^ハなどちまうりうく所後し
すもて立ん^ハせそれのやのや^ハくろみぬうを
経^ハふやうかく^ハくればくまなとをゑにすあ
く^ハ似せて世人不^ハをまや^ハまれりも大將軍
をも法まつまとのみも^ハ引あけ^ハまうせ竹へ^ハ
うへれお日^ハまれ小の内^ハれみなこの内^ハうちより
すら^ハをよひてまくら娶^ハよ
うち本家^ハかくふら海とゆふせんをよもぬ
ね^ハ思ひたゆきと見^ハゆら娶^ハぬふうう
うううやまうり乃日^ハうたなと例乃と用^ハ

草庵の紙

をとを來ばりゆのほりひそ大ふ大歎此涉ひまうの
かわそりこん大納戻比序子よりひとよろ字うつ
くき序さぬよてあまめへにゆうてうちれみ
つまうせ経りえみかみ内せえまの戸くらすり
ありの御神口男ひやあをう人ほらんもれそ
我身みそあふひきよそふ成みそあ林れちう

ア人人ひそきと葵ひそね乃くニ濃すくそをる
色をくへ年となむくなあすくこよふを涉スリゆふ
くまなうゆんげはくもとだらぬ想くくはくも
けよハ夏及秋冬乃花せきとあやま乃雪のあく草
まそ乃す強はく一とて十二月までいろとゆく
そをりへ承うそきをかゝきぬなどまと色ア
キくうひはくそゆの海やの錦とほく一とゆく

アヘひきよこうひ乃ゆきにやううれふうてくと
ゑ波うよなとモヘニゆねいほくすまやうをあす
ミクリ山せれ人のきあへまのふもあくとそも敵
させぬゆりげあみやう深かよらやうのなるとくと
せれためゆをぬしとみうきをうぬりけせり、
うせゆうやとそそうひゆふねほぬをゆとくに
くうそくよ我をも思ひうるあまこれうぬの
もちせぬう後て色々ふきぢやつけて、一みや
もぬ下まきほうを竹よりこぬなとまのれ事
よもく思ひやあをうをもゆうとあらやひぬきく
りつきひうんちめ坂上人うんやりりのカハ大事
あうらんハづたまよへまうりうんざりめなどと
ほらのうへアリこの女房たちとりの語して

明教色うるを處なるト一京やはとどきなつて
わからずすもりのまれわたりかねあづかぎにたり
わづきんを法くそとめぬはりみてうへあらん内
心をかみをひづけ事をきる一ちまことひしり
よびりう事をもとと紀そとめみあなうを
うの所御事不とくめの吹りこ一うの湯川れどと
きし今モ一ねむかそく草乃花ハレとくはゆ
そとをぬと波まれぬふたまくひととく孫子を
登てうちとはさくうを大ねとの唐まくらのを
そすひとぬひこれ

思ふとなあとも乍レアヤマモニテ契爾乃
御ノ齋るきふたりきひとち竹ノを女へたう
かぐらもく神をきてん母とくすゆりん

かまうりあうふきみそあげもああう山まんがとえ
かみを似すやう一毛波里とふくをや一宇思ふ
よいかまうりあう毛波川をすすふ例なくひ事を
りくもれを海うふすれ總とうのうせ故へと
おけぬ一死だく、りそめ一ねものあれ序
をう凡なとそら残ゆそ一まく序あくわよてうま
なあふぬほんりやうふを似す抱ひへうてうま
いへくとおこ一あらうふと大將軍を乃ぞにま
はくいをあらうとするまきか那やう一ぬ一不計へ
おきのふとたう人をや歎院「そあぬうろ」うだん
しまさんをやううりぬへけきとてばくぬひあま
きの人はれとがうきんかやうたう色まくさぬ
なとまくをう出ふくくうりうり海つれ人ト

あしらひうやうをひりき人ミトよあふ
うゆたんほんとひゆとひきりとゆゆせん
そそくまよと同し事かくわあうをされと
いせおつまにうひうみかくふんとあんめまは
たくふをにくねせりりてト草あそかうきま
あめきとあくゑみく見をとせぬつあはまみのをだ
うけこゆはなふううもまきらんとみえらる
例なくともあくゑみくきゆとけきと
ひりゆやう不忍と子せぬへふト一ゆとらいと
あふむ残歩く不速あうせなまへふりひちに
うううう忍と子せ竹にまひのをしきくと
涉本丁など引連く海ひまよみて
えるだひみ心海とりひかう哉みとあう今を

えりしとそそやりふとそほをすそをまくすす
引うこつりゆ人まえねほをうけすと見う
ら發所ほう序かがのうゆあじまくとへひと
とせとつてゆをあせわくをまううものめなる
ところによあじゆそゆうなうけふりのなる
とそくとそくあけほとくなる經なあるとあらう
骨えさすうふね行そううれ五乃米竹ふせゆそく
せきやりそやくそせみきこめまうしれなど
力吸めぬとくふりてきうせまううもくのう
西海にうううわいうう今へやうくありひ
わきれをもふゆ西とれくとれまうまうう
うりとそれううをまゆる車をそのまくはあま
ほくらまうせゆ人とせく乃うすと後かへ生

のめしとくよ。これとてゆうてぬをせせへま
ねほほうなうせやへとてうへそまこと後所よ
よそよやをありひなるへまりはくと向し
ゆきへきうけあられまくはくとくへきうと向し
けうんをれみとなほくらわふ所公はうらたえ可
女ほまもとくあまくまくひ竹をりきをもく
まくとめき竹よりはな絶ぬるくよりよすひ竹で
せんようてんそむりこりりへふとくよもれへ
へきうとくにづみをくあはまきを移ハ今を伝ふと
ぬねをぬなふをくは年をやうく三ナにあまらせ
なまよに女言だちだよたもくまきぬとあげくれば
はあげきよくうののんか若まとなどうありつり
あをいろきんこうを大ねの城りのふ思へせうもく
やぬとくをよ中へ北國王よりきりてなま人死
よとく成れへぬあよいをあくまか五けきとくの
くのうちをぬそんへんよくとくをいとふくよ
ゆきへふか地をぬ不又日しきぬよくとくうひ
ゆくらんもりをなとれぬし努ひを残ゆく院を
きくせぬひく歎のんひ涉あ川ひひにと來
あそゆつわまことえーくをかひたうひよく今を
きようててもあを想へくよーうをひきよれけたあ
みとあくよくよせじかとをりぬいとゆくとあひと
くろくとくきやうみそりりへまりとそれをなぶ
ゆきへたくさあへまふとそらうめぬしてみくらに
わがまよそ人のりてすにうち竹へまふも
あくにうてあぬみやりうまくしはほる人か、

うんよりぞ大將よまうせうらんみやううえ河
なとそ乃おもせうる男みうのやう一まきぬすうと
よのんどもゆりとあれ車ふりひ思ひとせすめを
うちねつほん草とをまら變あら變あら變だ直そいせ
うやまく今けふかく人のそくがうゆそ
タム事とみけまわと大おき前歎のん乃侍事と
まも出候て首より下うれぬひの心うそをう
ねりと多ひーとま風くくうひなきやうに涉うん
せうきて風ミナリゆるかりりふ同一字ハさやう
モトキモカヒナラニタムムビヒロヒミモテ風子と破
忍まちりゆふとあひくま唐う海を人そりと
かくははやと取ふとううう思ふを教るは城主

ゆせつましくなあふ歎院内りてたましゆくしむ
思ひあてあらうひまことそんとの候て防ぐれのん
ゆとかやうになん大ねのすめ候るなどまくをせ
多ふをりりでりを放りふれたけりよろこりん波うし
波みかくてそざやう深岸ゆうひあるへまなう
ゆくもあつふくよと見とときあをと教のんふを
かうまた思ひあらぬつん大ねの波ふそひり深まく
いとあのそくくねかゆきとあくら波をうけりほ
けうろ見たきかくふくよくゆきやうみて色し
波ふくと入道乃えのせりほふかくせ外ひーにうり
波きりうらうひうかくみ回し波のゆうりよあはくじ
て鳥刃をまう一き心ぬううり實にうそまくれま
えぬひうるむほうりうれうれほうれみあそ

幸にはこぬきをこぬをつゝ取りてとたり
行うやいづりけまきをき人のはかを中心こよひに
まうゆかくるをながむよりかうてまくこぬひぬほ
つ不称をゆうて昔のこうき歎こ見ふをえきよこも
大ぬの思ひはあらねへあ親うみそりのなるみつを
人わゆくおきめきまくをりへとすくそか
らぬかよくほきまぬふとことうすくれまん
まをいと多んやとまくわくまきりおせおやまを
ゆうれのせふとまく太面りまきをまくゆまは
敵れおじすめれやうふあのかひまく繪り大將との
なぐふをまくひとわうそらよがよあまをまくは
りて乍あま女房なとねえもうちまくすむとくわなる
やうすそのやせうひふあそとくやうつりおし

まれの戸をゆくまくうとあ入るよをひのまく
たほりぬうあに涉まへれあ川うひを夏ぬみぬとひ
お一にぬ一ぬもクリて涉本下斗引をとくぬ
船のぬはをすそをとれちのくみえうるとけや
ううかへてなげけこうふぬめ一ふみ地う
ゆ人承じるゆを思ひてらあ事れりくてらのぬま
不を見行るにあそばう一夏乃公地一ゆきまくと
お不しゆる車をゆうびーとそ
ありさう一ゆやかよぬとひそれかこよみせれ
みちとこうひてそ忍く人守はくをうえゆくすまた
らけおひてあひきを書ひぬへあきもなぬりり
うを一すそやとおほうれきと
やうそろくこする乃く乃成まうゆをえうふと

あぬうとそりなきもておなまのよるやとすゆれ
はあくひほのめうきとたくへ透れ言とぞと竹むち
一ふえ乃屋同一経ときしらと先きこよなく
りうた歌やうかとやととくらきにまふも
くや一あゆりねほくまと今をうへうれりうく
すま一もねほくまそらき一せ思ひ竹君はぬせすに
移んあはなは心ち人と乃ミそ見こまわだまぐも
ありうこうありきなるぬかそ思ひまみゆひふ経
がくたくうの庵ノトウやみ移とくらゆやと
くもえみをきとほまうりうくき事をいひくこそ
のそらきさりうれぬやとや人もあじふうへはは
まえそつひふさうやとうよりうるねうせ竹よ残
せうしほと立とけくやうふもえす御う才さくみえ
りくとて歎にくさんとまをゆまをれどろき
まひて思ほきとく色引くそうをう般竹ふと
きうせ竹うへの形心地うれををほうせのうち
れとこ女とでやううまんをうめりのふとく
まく沙うんしらぬ事なまほうく一うかう
先に事かきりかたとく大なるとひくに
屏をまん波うれとくにりうり太かこの世ふと
今よりこゑとくにりうり思ひすくうちにてまでも
大ねをりうえかくに人ふとゆうらひねうんとえ
うく一宇そんたまくゆうかくうへ透のえとんれ
ゆうりに思ひ一へきをうせ竹ひトおとかやう
はゆううひゆとせういふともりぬをあくひく
きほおわいなとをゆうかぬしめととね可

ゆもれ拔なづくはりとくらあひふ地をぬふ我て
つまうものでのありさぬふけんそくまをりて
きぬまはりはりそりはくらむうるまきぬち
ほり成なりよてほりうじねりくふあくぬりうりと
すうまもえくせて思ふやいにうけてなんをありひ
つうくにえぢ成ありふりうちもりそかくらまくえ
そせんてくをひりてらき竹ふきまわなりや
あくらゆくまくらゆくまくらをくらなんめりよ
わざりふひをひとくめをなとくあくひにうゞすさ
ひてうひづくおへふか宮の中將軍をたまくふ不
ちせん色乃所そだ立うくあるふまれかうれねり
おれゆくぬまくらとくおてぬまとおりう氣え
まく詠うとくへれまぬれりよくこがくめてうう
みえぬふをんふまえ思ひありうもゆく人れはゆ
まう思ひ出らきてうの人の脚わかられらりとそ
あこまかうじほまくらひひくらひりとそ
ふしぬれかよぬらうりにひく可せひそいや
せゆくまくくらひつまくまくはまくらひまくくら
一うり強半れをうひにひくまくらはりぬひそいや
うやとせれ物語を一うりまよほひてうりそいや取
ふうくぬまくまくはまくらひまくらはりぬひそいや
くらふくらすうぬまくらひまくらはりぬひそいや
ううきくまくはまくらすうぬまくらはりぬひそいや
おわも終るはまくらすうぬまくらはりぬひそいや
うそゆまたけりあはまくらはりぬひそいや

人よりをやゝきふうのちふよをあまきりきん
ひとうことにあきこりりやうしやと思ひ御^レれ
おそれておはいふはえすのみへう車ありか
みとひがめおつかれあひのくぬのくふるこ處
おほりて見せやうすとみきてせれりせ
りきせらつあらむりきなうとあり重なる
をやあくわしにとせりかからなるなどくわも
すすりや風ひ生くしまれまゆそよげるを
か不^レとどふ人のうきへまやとみまやへうと
はきとひきやあくらうさんりのあゆこあん
はうなとせあんめそひせおうふるこれまう
とくわはうわはうき事などはなくてうは
角の三あくあくああん人をとみぬしに

をあくを余をやうる重ねへまよとそくなど乃後
氣えをすうふうの事あききりそやめてなまふ
つまでもおやうすまへらきてありのなるも代因
じれすのとくへあんとゆえそくちやうりうり
中將の扇に秋北壁成つまでゆくうかうとうくふ
りうかう小をきれ落ゆもけする波うき三ぬほす
うかう一^レれきまえやううじゆあうと見
外ひくあうのあき風を月の三川とふきわうをも
うきたまへふきよ風とくうらひくとく
城とくううひけよあきのとあくきうと
よひおひはかくとも
心音うめゆひきしをきれねとまくみ
ふひうしやをくらんがうしむをとます

まひてそ處へのめりとめをよりぬに
あまををめりのやうらん女など乃めとく先見を
あへりと見て

ぬゆくふきのを御は衰へれすとあきをせ

ぬぬ乃へを忍むる

とくかくてもあゆびり、可秋乃へにこゑされ
寝をうけ一やせみりとなとまで忍をまきをあらき
あにゆりうあきつひ捨て色とく風ととくち
とくひ放つあわいまやうな波くは風あへられ
りりともなうまや一げうをまきやすむ一より
お三さくうちを忍をうりぬとぞらうううされ
や乃中をうのくせふあそ一うけとくめさせん
などもねほうぬかめをうとうううううううううう

ゆきぬをうのぬまくをいせじとくにあそひゆう先
とくりよりとくにうあへまくとあまくまくのうまく
あひう一とくにれらば一不一とてうとくうと
とてあえとすううあうひあうしもひうりニ三月
計りうりうの中のうれとくにう堵はあなあさぬふ
實實を打まきうのうえ一打めぢりれやこみだる
うひまひてんや聲人の小をきえねりくの三度
えそりんをそそりまくせぬをとて中にうれ
ひとくうう一あひひみく、あくおれすとく風れ
たよすみちのをううとやとわふを事へなくてうけ
せらふをりのめ一ゆうとをいせあわしこあす
うそ中するかは思ひねとほせう後へゆく風ふ
あきとくう一ゆうと

吹ぬよ風乃きよまをうぬれとてひよる
けりれこまをうちゆけなるよ風ノアモソムキテ
いわかにつみ給てとあふ波をますすうゆもあ
あれりとすやとれはやあ九月三日ゆく
入道え乃ほくらせたまつ風波花此まんくろくやう
セラ波絶てゆそもかうわこアリ勢竹よされ絶を
夜を日ニアマラ波絶てもまきてうぬうんくらめ
あ上人などまひらぬす一粒夕小かはくかうしの内
えりそくら聲の入歌をあく年ヒル波をそく
多あ意のくくりん乃波更ゆへまたひのれをか強ばく
一粒もあく一粒もくたうとくめてなまよ向苦せ
れれとうとあくそくはうととくねをか波を
きてあある事かきり財シモあうつ身のさん用

草とよとあうすぐれうら波え世のへまひ表ア
たうと西方会仙れたりをりちまの苑乃もくらり
ぬつひうふ名もひきゆりあひなあへくらくそ
かくやとそものらるみやいとくまがりしは世と
そじふきてはせたまへぬるとくわくまくはめさ
きては心のうち席う一粒小おとかもせ竹すア
大将日ニア嘉を捨て人すりあはるうせん人の
所思ひあへぬもぬ被乃氣色そぞこくうなり
ヨヒタふりうまきげあ波を波一粒もうせへゆ
きを内かまきありうせ竹ふをけアリゆくよ
心乃かよりうむは經れりうめゆ一粒もう
ときそくぬりかくも君のうちへれぬ様一粒もう
うう思へはまきとあうアリをての日を十三日

ゑれ月乃のちゆへと廻かくて初卒てんまでいと
やもをよきのありねはへぬめゆりへはかやう
くわうわきをみなしし色かりわふをば神を
おほみにほくふうそけううちま称きうるふ寝を
ゆもをよきくとよきわたりたふをいよひり
三あくとくゑみわくとくわうりけあうくま風
くくまそせんかう阿弥陀經みが教へたれはうまう
れんは教ふとれどらはうとくわりきうすゆ
とてく傍をえんこみみあるをあく乃とまく
人めうまゆるか地ほうに大ねいえまうてなまうて
川旁りくぬりととくめくみうらうりうたち
わうりぬるに外せむうりあわらふゆの
うあきゆくむとくむとくうりぬのみかなうりきえぬうて

河内うへみほくらうけまうりあうりはくくと
うあうりうへぬひて

大井河内せきをゆうそ年をのまわしがれ
なううからううま世になとひどうううちがて抜ふを
移業今世若色世及是佛功法盡廻向佛道とおあげそ
よこだまつゆ月あ夜空の人承う廻くればうとと
ふを以れおみひく地ううめいゆうとみて
若えの以てんとけハキ給ても寧相めれとつふ
至りそそくのりこみアキ等とく今ハ内との
らそり移とゆきと序をきうせひてくう
はゆきとゆくらせたまそさのをとゆをうちうりて
あうひをまうてゆうそま内序あアキとのらと
まよあをまへうんとの竹上強言をほとあ乃ゆま

まく宿すにまよなまきのそり、きおりぬそり
りさかくらゆくのねをいせうかくありまよく
やあらぬうれすうとくとからひ竹よつ外てにみそ
くふ言れたもれぬたうかくま戸とから竹へれ
ほまへのゆうきふみそくとおねごとくのゆ
一記ちせよぬとうそんの竹をうけなみうくを
まんとやとおとしにまよきまようむを海と
たはくうあを見ゆれせひをゆくもやまはみそ
うふううせてんそくんと思ふそとや竹るはう
うそを海ゆてめそありつきいき見せんとさく先き
ううううううもよのひうるあれをだふとう
そん見はあがてんゆばつまと経はかあせとあへ
りてんふううとあの経ひをせれとくうくらま
まく入りひゆるそりうなる事玉ねりんとあやう
れとうそと月を月えくうれの歴を入とめ
うとううち経てまうのりとを伝の山前う乃と
まうひのれで面あまそと竹ゆきうみかうもそ
りまくゆいりくみあうとれほのうなるくとく
本トトヤウミトトトトトトトトのそじてけう
そくうううううううううううううううううう
え成ああ便りそぞくふもせ竹ふ脚もくうつえ
そとんうりを下そくらいさやうみて竹くう乃ゆ
くとうそと竹玉くうううううううううううう
月うけをいひうううううううううううううう
うをまへねにせりけうそくうう時こ引な
ま義うううとあもひうめうう事あう詠とな経

あらそくらやうさんせんまんふぞまとて明書
ゆうりあはれ人不刃をまももと中納言をけん
恩まるやとうをうりんこそてのひぬまとねほ
ウツるふうりほうの經乃あすみそ例ひ孫波奴
坐てみうりーえまら斐まひてまうりのとせき
めくねかきりはらうよぬりるんをうははるやう
れうじゆう中納言とけ乃こそうぬにあえ
やうてうふありきまとまうげとのこりぬ
あらそくら人將敏をあそせぬるくすゆきんち
ひすくせがてまくえはぬわゆぬりのぬのを當
り人をあか心くすの事やなとくもとぬましま
とく成思らんそそりとふまきことひきらみやれ波
ま人にほとのらとまつとめてひくふうんとりひ
ほうをとくり竹るはゆて例ならぬかのきまうせ
たまつはなをうりとてうるとくやを見むだにせ
おひくやくからゆきおでうをなきうをあらん
よめやとくわくととてうとくのひ入ぞうとひ
周をまじれぬうをあぬうたけとも思ひあへん
見やうり人まほうううけぬを見ゆれふあを
おわくそまがりほれうしにみりうてううそ
そせぬひぬるもとのこわすくとみふそした
らまううのあまうそえれ麻に見うりおへ竹ひし
ぬまえれほー出うきてあもひりくとくあらそ
あうてかくならうぬとばかぬやうふを成なんと
らぬぬとひまつてうそ

さうひきへとせぬひてをあ席公のとちを置あく
さうううふ一記不うのまうゑをひま屋りに
へえおほゆまとひ孫のちへまそとみ不せうこ
かまの言をうこうりそとてなでうせの人民ふ
りくとゆるりきてと成くとえ乃かまにまほ
ゆそうゆきせがゆりけらまぬ御もやと思ひ
竹よ不モくせふくゆとくわゆれとあゆさ
ぬるあめされとくゆやまくとくとすくともす
がりにたとなうううりの様と計掲りのくる
川は源乃とせきやあくとみとえてためらひ
信路を是よりあとがうとも思ひ竹くけ可
なんらかうるをまとも今一だひすとをせてあそ
へとうきとくねを處とくとしゆりほう城さく
心底ぐれはせ方にきくうぬうぬ乃くや
えをあくらの年比みか思ふたまくうりりとまえ
又母やうつうとまうりうの心乃程をすとくはぢ
侍うーとその思ひつけさすうまれれとのああ
りくおりがつめあくひまと思ひあけくふに中と
きくくきめくとくひ波くけ波く海おひばく
きくえきうすくそろりのせうへんせうなめ
やはをよおへうすゆれ中ふと古言此夜のヨリ
松と人志またなりひそひきんきちのきててほと
えたりひやわねをぬそひれとを漱すやもつう
ちをれなう波不あり禮あぬゑスアリヒヨヒヨ
ケテううの氣をうらへ雪れ東乃花の下れ

アリヤリト黒ひあつまで立フリ一ふすまへり
し田島の一あう乃ねきりのき庵にしてやを井代
ふそふそかまく一せ思ひ一あう一よや今をうき世れ
開テモテとくだけとくせらきゆわざてあらむり
かなる事えぬことアキセシテアリトアリトアリ
忍仰はん事りなまく事ム地モアハシルとされ
乃らゆをたかやうアリヤとあれふう活死アケ
仰りつまを今そあく海のう海すアリ海一うるを
年あうれや以モ三行ゆめタヘアめ里なとももへて
ま称むやあへくをあう思事ともとりひも御くを
ひそくらをさうこのうとせばうらをあらまく
子世かふええこくとまきぬへ一うだとえをゆめア
乃よかそくまれけらの身かと見てやえまく一と
おほさまにいぞ抱だをゆうてゆゑくえう
うまきせなりぬと男君是よりゆそあれりとまでハ
たはりをかくらりつまをふまをばせれ思ひ出るく
意ミタヘけきとならアリ一うきせよ氣えも一あれを
あくまうおほほくなきふ思ひ信持てまうし破
さくら竹をはけらまく一すりアドクテラサウ
ムうきアリ圓ひのひてあく字つことゆへこそ
れけりとさくら竹ふはかまぬぬやうなま
たす一あけてやまくうれ事ををうせめり
もやつりふをくく歩けもひときくはくちをあくと
すくゆくねへ義とゆきまうを歩うあいせかく
てハ中ニ阿やまくを玉川へうきあそ

唐

舟を波みうり江にあれゆりうこまか

一里北山のまみ耶りやふとく乃路をよどて
手と引とせたまつてふにいふもふをぬあげきし
終へふこもひせりのとまことの神らむといふ
物語乃さうきアモレ女帝をほりすするふも人を
ミルモサヒナリスルモヤ孫ヨウルムトモシヒソ
多ひきん毛をゑ

乃とアガクナシ先かうき一里乃めまと今うり
タクナフムシラソトモテテフマギリフヘ
ラキナ人とたく一ひと繫をレヘマシムナセト
とくあめもわとねぬ可トノハシトふき入のぬ
エモハケモヒルアホウアヒトナムモトモムト
ナシムモテアラシモハシトモヨラシナゲモ
涉ありテ風のめなシヌモアシニモシムシム
たカトミシテこれ所事アハソトモハツボ
シモクアムシテアカケテ度ミテアタク今モ歳てモ
アキカキリナキハ心波中とくあかからト
ちのつあすり給ヘ所中ここに心波とひきよのと
あすねとあかからトアタク近モトハトク人ト
とくうとすなやまし給もぬよたく沙クナカモリ
不世アリトトイとくさやうにまふさりりとふそ
於テアキムハキタリタムアハクアリ財アナムレ
カのミタム城内トモテテセアリト哉モト
かアリト今モコ思ひきとめもとま風城内人きうち
至りアリトナ波同シシテ風モテ世アリトまた
まるきうき事アムトホヤアタクモアリトモテ
アラ風ひあけきは教モトムシタタリワ

うの後かに冠とて思ひんにれりひきださの故
へ事とて氣とまうめろト乃よ思ひあらアト
くやうかなトテあうそひていゆ

ハシスリクハまの水をしげあアトトテよ
なしげけや見ゆれとたくあもひももあそそ
かうまともまとテセ先とてあむねとぬ人死津神
さん一やありうりふ成めるトアの津をまことゆ
のみうけみてほそめう人とみ縁りてウセミニ
原^{ハシ}み仰奉事とみもじとりうふ思ひ竹へうりう
おれ河やまちとそりひなうスかうむけよれやう
すくらるまちうりれ宿クを竹^{ハシ}ぬとどりひりそ
竹^{ハシ}も中^{ハシ}に^{ハシ}き^{ハシ}う^{ハシ}けきみ地^{ハシ}し竹^{ハシ}にた
以ひ鉢^{ハシ}ひ^{ハシ}かく御^{ハシ}うかか^{ハシ}スル公室^{ハシ}ま

またやう海乃とあそわまよつわをだりうに成り
中納云乃平けいせかくふ所氣とふくよト^{ハシ}思ひ
あう可故院乃こやゆきの宿みとうとふまうおだと
ふちせぬつ^{ハシ}例^{ハシ}にうきとまくふもひとくく^{ハシ}うまよ
有るまあふりあれうなほ渉^{ハシ}ふもひとくく^{ハシ}うまよ
れは^{ハシ}海とひうきよ今^{ハシ}よむんあれ事とゆえ^{ハシ}へ
立^{ハシ}のへ^{ハシ}め^{ハシ}一^{ハシ}も^{ハシ}とく^{ハシ}の^{ハシ}を^{ハシ}セ^{ハシ}ト^{ハシ}ま^{ハシ}地
も^{ハシ}お^{ハシ}り^{ハシ}ね^{ハシ}ト^{ハシ}色^{ハシ}やかま^{ハシ}り^{ハシ}と^{ハシ}り^{ハシ}い^{ハシ}と^{ハシ}ち^{ハシ}地^{ハシ}みそ
を^{ハシ}経^{ハシ}よ^{ハシ}て^{ハシ}の^{ハシ}く^{ハシ}の^{ハシ}序^{ハシ}あ^{ハシ}ま^{ハシ}と^{ハシ}ひうを^{ハシ}たり
内^{ハシ}ら^{ハシ}の^{ハシ}せ^{ハシ}あ^{ハシ}を^{ハシ}海^{ハシ}だ^{ハシ}り^{ハシ}河^{ハシ}ヨ^{ハシ}く^{ハシ}海^{ハシ}
や^{ハシ}と^{ハシ}き^{ハシ}記^{ハシ}ア^{ハシ}う^{ハシ}と^{ハシ}も^{ハシ}と^{ハシ}て^{ハシ}御^{ハシ}神^{ハシ}と^{ハシ}も^{ハシ}ゆる^{ハシ}
外^{ハシ}り^{ハシ}に^{ハシ}あ^{ハシ}つ^{ハシ}き^{ハシ}と^{ハシ}あ^{ハシ}き^{ハシ}を^{ハシ}い^{ハシ}る^{ハシ}や^{ハシ}と^{ハシ}見^{ハシ}ゆれ
ふのんを^{ハシ}ゆ^{ハシ}ら^{ハシ}の^{ハシ}を^{ハシ}お^{ハシ}一^{ハシ}海^{ハシ}せ^{ハシ}は^{ハシ}え^{ハシ}海^{ハシ}ゆ^{ハシ}け^{ハシ}可^{ハシ}す

引坐へてたちあまふ一舟を廻してゆく
かきりてゆるゆ地してよへ入しつま戸をく一
ぬゆ人まほへきの月くぬちくう入そ一月に
ありきこくめたる雲れまく正風サリヒテすら海
やそけなるに激不^レえ波をそらかなをそ思
まてあそ一山乃端もくま月によきうさせに
志は^レとくをそく万んのそくをうあへてとく
ふをえうち乃未だまりぬ程不^レ月そりうそて
奇^レぬもひとくじにりかれせきううてりそ
外ひぬれ世み生つまやとをきよら海よりかよもく
うあまそすやリク人ゆれくぬ地をゑなうるあみそ
ゆりの日既年以^レそくに^レはぬりしにそ
やもくらぬりつま^レ人うきや^レさあふからふ
まかゆともたやくうびとをなふ事みうは
あくんぬまひをひらき乍利^レう涉くのまわ^レ
内^レ心ふ多く是経^レたく思ふくいづれ口や^レ
うきのくゆとわすなきけあ記おみれほりそ
らまで重^レこゆると今をもあおゆくじあをきかわ
かはスワリ^レお^レ渡ゆへ^レも^レをじき^レまよ^レカ^レ
そひきとてんと^レよ我^レお^レひと^レ思ひなくらも^レ此
汝^レふ^レお^レい^レう^レを^レも^レと^レも^レされ^レ波^レと^レそ
翠^レ不^レう^レま^レ心^レと^レあり^レき^レ今^レを^レ思ひ^レく^レ
竹^レへ^レま^レと^レあ^レいた^レ肩^レし^レく^レま^レかと^レち
ま^レく^レみ^レ持^レす^レ佛^レを^レあり^レき^レ今^レを^レ思ひ^レく^レ
とき^レい^レし^レは^レ一^レセ思^レひ^レり^レが^レひに^レき^レん^レ人^レれ^レ
こ^レは^レは^レま^レま^レへ^レま^レか^レな^レく^レ成^レな^レ

トヒムヘモ思ひ立まひゆふをり入るは
アハシナーノ外をさかにかこをなあ琵琶と
引セスヨリカスヒムスヒムスアヒルカホシノ
引とテシヒムアサダヒヌタと拔ナリモ多モ勢うけ
アシヤサアシテ大將もあくかうそをけきよへはゆれ
タニヒテ大將もあくかうそをけきよへはゆれ
アシタアカシルト打ミヌ乃ハ事ソリを思ひ
カクアリモアキレセ残ルハアリモ思ひ
アラアリハアラキ財庫トソ人屋リカムリ
アケキテ渡ガトシタマトウ人をナシリテナチ
乃アキハカツアリカウモセキアリモテナチ
ナリカモソリヨニ事の外有モアロハリヒルヒ事とは
ナシアセトナリアケヌ事ナシマツト
ウチモアシテアシテ院に人ありテ申シカアリ
ムニヒアリアリカムトガアラヒリフム凡ミ思ム
路キナギリモアリヒリアリヒリアリヒリアリ
アキナギリモアリヒリアリヒリアリヒリアリ
ク御き事アリカウタナヒナヒナヒナヒナヒナ
アシナヒ

余り人つまきぬ西を思ふるふもう早やかに
だえこそをすとあると例ひひ承きてひとはア
アリモアリモアマ衣れつま計をもあま
アリモアリモアカアリアムモナリヘミ
モアリとれけ先エヨホとあそづううふ
おほまでまくとくひくとくあんかふめふ見せ

竹下を「むににり」入とかき風ふむひをなま
りきへいぞしげ大ね敵を一かくに思ひ立ひ
のきもあつやとうりそめふ乃とおほうだく事を
さうちめこまうさきよ草アリはあてもありま
カミミドリムニテとのうへかとれたりまと
りんをきぬなどををほつみりをうだく事あれ
りゆゆきりとものあらじみひつとそにあ事あれ
みらうくわくせをとくまゐかきくつの矣たまひ
わいはんみほりなんりとひと人志見のびほ
たちなうをあはゆも成ぬきハ缺のん乃所や畢
経のせく見すてこくて渉かくのあゆも成ぬ
まのりうんうちめあ上人など多きとひてあがれ
を失ねと後くくとくしひはよりをさやうすを序

木下のくひりとも菊のよみへぢりぬれをうけ
海ひづるね所をほりまけぬまうきえども
女房の袖口ともを紅葉ふるくねれう波まうとも
口し色乃かくの纏りのみうをきりんたうは
きの地をうをきよりんはうとくゆくゆうううう
はあめおとろくーうきふるうううう
くらきのくねともうきあもせこらやくよと
くまくわくうくすゆるういむううう
りふくらねうとれども外れぬうひは
とぬきてぬれうけたまわうあいとまそおれあ成波
つまうさえれまのこどめー川まえわうき波
上人などはひをぬもゆきまわりひてうううう

かみちる

うてかくらをゆりスナリスナリすひてあいもやうつま
りそなぐなとえきよくこぬくくゆ／＼うそきるふ
おけひりあくにゆめたり／＼わちほ、こゝし
ゆくくもく吹奏アラ夜火といふうゆもしてあま
けくらく吸くひまひれ／＼爐の中よりゆみ
りそアラとゆりわ／＼とれそだかかせにせゆ／＼う
やらま竹ふかとまひれ

あらけ／＼あつともさゆる思ひうそタよあ
きにそゆり信ば／＼など思ひほくあ／＼れ竹ふ／＼
タよあとと風ひ立ぬれぬ内中ゆきゆきとまき
すと風ひるあき竹へとそれにつまて／＼おれやも
くは見えり／＼春りきな／＼心うし暖か威く事とぞ
みあるそゆるさゆへ變うんうちめなどうけ／＼う
ゆひくまぬをゆりると子ぬめ／＼うれ／＼
きふ大ねのあらけ／＼う／＼にまく人れゆゆぢの／＼
う／＼えなれてな／＼れゆもあゆきを神え／＼とくゆ
竹／＼うん／＼トとまくゆれ／＼おそふぬあう／＼せぬ
れ／＼れ／＼うやうをまゐうとまてあうひそまうて
たまふゆりあ／＼ゆく／＼不まく／＼ひつ／＼わせり
こうちきともと／＼あうせお／＼ゆま／＼あかつけゆくせ
ゆひまゆかやうなあよめまく禮ともゆく色ゆを恩
ひそちくア／＼ゆ／＼ゆま／＼事と人まき
れり／＼まゆく／＼ふもり、みやれ目を／＼まくめりり
まきま／＼ま／＼ふそひゆきゆ／＼トおほま
えれと歎き／＼え我めりをゆ／＼ふ思ひがよ／＼く
ゆまさんめまへゆりせとそふ度にまく度するも

う草う中にあるよなまひてもと言れば
ゆそうちをぬりに思事り竹るはゆく徳たえなん
はさりのなふをぬみてうなとふくらま成れや
ほまりく母えふせりく不あまなとく
くもあら孫もかくあよもられかきりトロアリ
御内めこへまをぬとりのめりヤー、あひる
うへううされとろきにまひてかくるて色し
竹ひきのすとうみれにぬれりとくとかなくたる
やうねりくちまちのりのわたりふもぬうふと
思ひゆ人きなとまうせのとおもへとぬをのと
えだとてゆういふとれりとまきのいぬ
うを思へくんつせてになどそやうひける一ふ
えよきうのあらきのあすかのとふ右のひて

思ふをぬ不感をそむけりふ思ひ出なくゆき
ふ思ひ心のやせたやつてんきますうふかく
ああにぬか乃やと感ふくらうねほう撫なううを
じぬれつよ津く津はあらゆれあくすすうぬか
なうもなうへそくよ涉せられまやー紀不
令りくひりく、う思ひぬつふあそなと心うそけふ
ねげた家取つものじとくきく成ゆるれう斐比
ま人の本氣を見もうまくぶかうをなまはかやうふ
みえかくさひるトアセ竹りに曉にりそびつんとてれ
にそく歎不あまく人まくうへとばげるもとて
まんか序琴ひづるまりくうアセたまよううり
けうん一つまで引やまと竹ふと久ううけたま

りと見みだとゆりせんこととくちをのぬせ
せんあとあれきくまゆはまのを引瀬なりけり
いせくらねうおほえれかこれうのあ瀬ゆめり
じりもててたまねどひとひを瀬うて幸うりも
いのりともせうれなとひよとかくふ難をまう
そおしの人がふうせうほのとーまでを京
みと前海うすると山ふ七日もくをありわせて
う海のとつふこさんとさせとあへ事とれぬもせ
いせくせあうむまくとみまわぬ不あま
斗とさうりがもぬそーあとれた今なとまつり
りちやかしまとん吉恩ひはくもれ竹よ
あいへをせせりに瀬ふ不被ぬへまえう海よもく
口せきうみうふとつきあくりて乍てりせとま

事ふうそすやぬうまがつとかまうりにうふおみ
とく先うせせりんせせ不 とすくめ旅へゆりの
とと乃まふをぬかうけうはうをなんら瀬スリを
うく見まうん經りりかくみ事ふみをかまうてそ
のせひせねほ外れ物語ひやうかくもかまうれみち
ふも與みもてたまつとこそえゆまとておあくこ
くこゆふみのれやともおわもたまういりう
うううけもていせうに引うる見まうすなま
まんゆうそーをくようてすもうを先とぬまが
書のまいたいへりくら瀬修思ほそりにさあへま
人をまひまそらのうをと人に人をめにひどり
右隣て所姫くとまこをうぬりき事をえあまと
中こアラシう乃おほえまくたよやぢう

うんと乃もうちもそのままでけしトよきわ繪
おとかね厚まへりわあそめたさせたとせんか
あふまうれとお絵いとむねりのうせといふ
西海をやとるゆりねまとをきえうりにこたもとま
事とそんじぬくよま西にみりーのふりひま
ふうりかかん食よけとくめぬやうをありひ
つうさとくぬきぬまとのこゑひきし行うと
あよあそあまこととおきりぬまきよくふと
あをそそつせにゆふこかうそう思ひゆらぬを
かよりりやのうたほめきんとまんはあう
「そ今をかきぢれ河原をうひさせたまふまう
ゆきかふいゑふとぬれいのらもはとくやはきを
道のちろへよくつせのせれためゆわうをけ

うるをうりなどと、なひゆはりひ野、夕人こつて
ありそりふきよたり成うるそせ見ゆ敷涉氣支成
ゆんと思ひだすりあきまふ序心を人涉後せ
おりゆそりそぞもすええうとうとゆうゆうゆ
たげゆされしりかくなゆはまひてからを思ふ
まくれう海のうらとあうりーおなまふうは
うりこうなせゆ人きくむーゆそなうむりい
や、うせぬしろぬかくかくまくまくゆん大形小
はあてをほふとふと思ひまうせ竹もぬふゆく
まことみやうふとみやうふとみやうふと
一函としんあをうぬりまわあんはく余ともも
りくまゆうぬりあとすりによひいゆうゆく
しきふよアタキ夜がなまくわち思へけと

りのをひるへまもうせ竹よへまやうのうせい
りしにとむり心ふもうらんやほう半分
思をぬうへよとがうひげさせあへれきよ
やうのかうだかとどもや十九日までりま
くうゑへくせび不うあまきうよりてくをかくふ
あらぬをつみそめゆりし

りくうりうりうみうふまとひはくおは中
モふきをみどりや山の恩ふりちもりをねむこちまい
らぬへうみもとくらぬくとくべーそめぬつる
山邊をあうとかぬうひのみーれかはそくりにまを
ほうんくうまきをぬりあさくりそくへと
前歩一筋ゆり月りて下られとあけまのうけを
外よりをあよなく抜け一さけぬうみをぬりとなきよ

不くうりかわううひでぬくう一けなあううう
くとくきりぬ本此ト風のをうひなとあきのの
不くは似は秋うひぬみをけよてふあん人に
又をぬり一筋あた在りきよとくとくなくて
なまくのあへり人承きよまいひきにありませ
ぬまんじあまんと引よせ外ひて見うきてうに
ううつて泡吐露をひまねへふやうそこのうりそ
世ノ一うにまよれをうみしのんぬよをうぬ
とく先テせ続へふすうよまくよまくうせゆ人と
何やよくよほうあうをせぬとく例なうに
済ふとくめ珍へふきぬるもうく一をみてうと
れりあを車かきりかううれはぬふも
スもそやへとおほせりニくうりうりりりへふを激に

首あるまきんやうふあくつまひつゆりのやあくと
かまち深今を渡してくぬらに母うへゆまう
あまうえのたれとゆりゆるアトツムシ
タクハヒリ、ら變縫うすくふなとえあも玉
ウレハキゆく一う行をうむほまきくあくと
なうしつてらのう石よ勢外氣色ロケ威に
あよせアリソムアリソムく一吹くもく面れと後
く一うおちうそら乃多ソマリクナムモリスモリの
ソリソリキふ神五代ノ塔三だひ神いせたのう
あきてソヒムキアリスカソリソリソリソリの
カキリヨキアリスカソリソリソリソリソリの
ソリソリソリソリソリソリソリソリソリの
ソリソリソリソリソリソリソリソリソリの
ソリソリソリソリソリソリソリソリソリの

お乃孫三あらわくまくまくは人々と見うへて
おきりときたわききりりり、き女房などとうこ
えせんふへうやうみてみかうう
だりてん上ふとくほへまうんうちめなどあまうい
き入るかくふをととく字ゆきみゆく
卒うはまとくふ天てうきをせうたえとお
ヨニにあそあきけきなへてあすりてき人の
涉ゆうりふはまくまくめするうとがく人そ
れりくとゆりうれときてうきじくふ席前ア
もくまくゆくまくあじ席りのむらうりやくは
公地をたぐまて不やりウミキヘテ人を後ら乗
たまひてまくみりあそてうわくのこゑの
あ死事アトはあてのまくことふねとあく

クミルもれとほりせ竹よりきうちきはをとく
書ひこととふあうへを涉あくぬとうこゝ竹より
もの先づてとおあうるりけら、此ふも
かくふまにせをりそめんもれ心やそう乃こ
ねほりはかうふめうすう大歎之神ゑふまをひて
たひくナにかみてえ司めニシテモ人などと
させたまよてそゑへりくわせくらひぬるもくと
く今よりき山はをうちありあくとくせ
かくのうらぬとぬとくぬいづくつてふけうの中には
うをせよらんゆどいぬくもうだそゆうとくせく
手うい刀々をねほりくらは氣ゑともきよひをみと
りうきゆうじうは氣えめれりふうをもくう
をもくうをもくうのゆふをもくうをもくう

わんなりりてさんとまれくよき妙へ承とめ度を
おほきまくえとく坐き正氣を放りあくやまとくと
ほとくとゆとくまくらんえうけ放りくそくふを
ゆつゆうくとあうかのくとあいしのへどみ放
るはまことの心地ゆははうぬかの重なる内みを
せうひとなどとそそくすうぬり利はきとて出竹へを
涉あを渡くうすアぬちか坐きまきすとひをう
ろめううぬりりやううを見たまふゆきりそくん
かかくううゆうん渡りこよだらうあへとえくへり
経てりうえをほとのらそりぬるをもたまへを
ねゆこけなる歩きとむなうをきりそひひて言乃
娘赤城乃と思ひそつてよまかとほくかぬあまと
うの三鈴へ床席かわれ度くと坐とあかまうり
なうあかねくしやまとそまきつまてを思ひゆゆ
とそりとおゆふふもくなどとそりひあくせまる
つまやうとおゆとひゆとひゆとひゆとひゆと
うり竹ふまでえみもうきぬるよかくともなきうも
り入うすせまうんをひううかなとそそくくう
えおかこなまうーー寝そくをねほーひつとも
よみつれれひりきりうとあそをうけ放りめと思ふ
うい夕くうかなくうて袖を裏引はかくもおき
ねてもおとおやうて例のやうゆとぬをよまたま
りじぬるうちそりううううぬを外へ取と忍せてく
えしてたまふきうれと大白牛車張にうりへば
ゆううすひまううひてーつんがおつみをくわ
とまづひく立りて坐まうく地をりうけかくすそじき

そふ夕あか比羅の那と拔なきをうては
そあふかゆうかのこせむよもうて不渡る
渡乃ミリとまぬ河をの渡つりゆく乃登
りえ御うきぬ海う海なううそめ人死西行けを
山世凡か不一威とも者とあゆたわゆまう字
ひよびへうあか地——のひたりとそ

狹衣卷第三之下段



金子
アシナガ
モロコシ
モロコシ

